

第18回ビハーラ活動全国集会 分科会一覧

	テーマ	講題	講師	趣旨
1	ビハーラ入門講座	ビハーラ入門講座	野村 康治 師 (社会福祉法人本願寺龍谷会・至心会理事長 / ビハーラ活動推進委員)	ビハーラ活動が始まって35年、活動の内容も多様です。今後の在り方を今一度考え、これから活動に加わりたい方も一緒にビハーラを学び活動の輪を広げていきたいと願っています。
2	障害とともに	障がい者家族の未来のために ～知って欲しい『親なきあと』のこと～	藤井 奈緒 師 (一般財団法人 お寺と教会の親なきあと相談室 理事 兼 アドバイザー)	「私がいなくなったあと、誰がこの子の生活を支えてやってくれるのか…」 これが、知的障がいや精神障がい、ひきこもりの子がいるご家族が抱える不安です。障がいのある子だけでなく、親も、そして“きょうだい”たちも、安心して生活し人生を全うできるように、問題点と対策について考えます。
3	子どもを支える	子ども・家庭・若者 現場最前線より ～わたしたちにできること～	辻 由起子 師 (社会福祉士 / 子ども家庭庁参与)	児童虐待や貧困など子どもの環境が問題になっています。大阪府子ども家庭サポーターや小・中学校の相談員の経験から、子ども・家庭を取り巻く現状を考え、全ての人が子育てを楽しめる社会を目指すため、何ができるのかを考えます。
4	災害支援	誰でもできる災害支援	三ヶ本 義幸 師 (安芸教区広島北組徳行寺 住職)	阪神淡路大震災、東日本大震災をはじめ各地で発生した災害や平成24年、30年と広島を襲った豪雨では身近に起こった災害においてボランティア活動してきた三ヶ本さんに、これまでの経験と災害時における役割や今後の課題などを聞いて、これからやるべきことを考えます。
5	医療におけるビハーラ	死ぬのは誰か？ ～死を医療者から取り戻せ～	坂口 健太郎 (あそかビハーラ病院医師)	「在宅死」を30年近く実践してきたが、その父権的体質を大いに反省している。死にゆくものが自分事として死をとらえることはできるのか？ビハーラ医療に導かれる世界を一緒に考えてみたい。
6	高齢者ケア	認知症になっても出来ることを支える ～ご本人が当たり前で暮らすこと～	深谷 誠了 (社会福祉法人 高齢者福祉施設ひかりの園 施設長 / 一般社団法人 熊本県社会福祉士会 会長)	超高齢化社会が進む中で、施設におけるビハーラ活動への期待も高まっています。このたびは、認知症をテーマに活動者が傾聴をすすらうえて、いかに尊厳をもって関わって行くべきかを考えます。
7	地域コミュニティにおけるビハーラ	埋もれた声を拾い、コミュニティのつながりで支える	森 祐美子(認定特定非営利活動法人こまちぷらす理事長)	超高齢化社会では寺院や宗教者が地域のネットワークに組み込まれることが重要です。地域コミュニティの構築にビハーラとして何ができるのでしょうか。地域に根差した活動事例を通してこれからの寺院の在り方や地域とのつながりを考えます。

	テーマ	講題	講師	趣旨
8	浄土真宗のみ教えとビハーラ	親鸞聖人の救済観とビハーラ活動～願われないのちをともに生きる～	鍋島 直樹 師 (龍谷大学文学部教授 / ビハーラ活動推進委員会委員 / 兵庫教区神戸中組真覚寺 住職)	ビハーラ活動とは、仏教徒が、願われないのちをともに生きるひと時に、仏の慈悲に照らされた「ぬくもり」と生かされている「おかげさま」の心で、支援を求めている人々を孤独の中に置き去りにしないように、その心の不安に耳を傾け、少しでも苦悩を和らげ、安らぎの医療福祉を実践するものです。ビハーラの根底には、いのちあるもの全てが弥陀の本願に一子のように護られている「ぬくもり」があります。如来の大悲にいだかれて、自らの無力さを知り、それでも安穩を願って生きる姿勢についてともに考えましょう。感謝を込めて
9	教区ビハーラの活性化	ビハーラ活動30年総括書から活性化を考える	伊東 秀章 師 (龍谷大学心理学部准教授 / 企画研究専門部会専門委員)	ビハーラ活動は新型コロナウイルス感染症などの影響により大きく制限されました。ビハーラ活動30年総括書において教区ビハーラの活動を調査した伊東先生をはじめ、各教区の活動者に実情を報告いただき、教区ビハーラの活性化を考えます。
10	グリーフケア	ビハーラ活動とグリーフケア	黒川 雅代子 師 (遺族会ミトラ代表 / 龍谷大学短期大学部教授)	かけがえのない人を失い、悲しみの中にいる人々にどう寄り添うのか。大切な人の死にともなう「悲しみ」、「つらさ」、そしてこれからの生き方について、同じ立場同士の人で分かち合う「遺族会ミトラ」において遺族への支援に携わる黒川先生とともに、私に何ができるのかを考えます
11	傾聴とビハーラ	がん薬物療法、造血幹細胞移植病棟からビハーラへの回帰	今井 洋介 師 (長岡西病院 ビハーラ病棟 緩和ケア科部長)	30年前、ビハーラ運動が日本から韓国、台湾へ広がっていく様子を目の当たりにした後、臨床研修にはいり、其の後約25年間、さまざまな難治性の悪性腫瘍に対し、広く、深く、治療を行ってまいりました。その間、臨床宗教師の研修生において頂いたとき、患者さんがせきをきったように人生のしまいかたについての相談をされる様子を見て、あらためて宗教家との協働の重要性を感じました。長岡西病院ビハーラ病棟に着任した今、改めて宗教者と医療者との協働について、ご来場されたみなさまとともに考える時間としく存じます。
12	ハンセン病から問われるもの	ハンセン病問題の取り組みと琉球弧の基地問題の現状	奥間 政則 師 (沖縄ドローンプロジェクト / 土木技術者)	沖縄県在住の奥間さんは両親がハンセン病患者であったが、親は一切ハンセン病のことを語りませんでした。自身がなぜ奄美大島で生まれたのか。ハンセン病から復帰後も差別や偏見で苦しめられていたという父の証言の記録をもとに、「ハンセン病問題」を考え、また、「沖縄の基地問題」との2つの差別をテーマにお話しいただきます。